

# 社会学部研究演習・社会調査実習の運営の事例報告

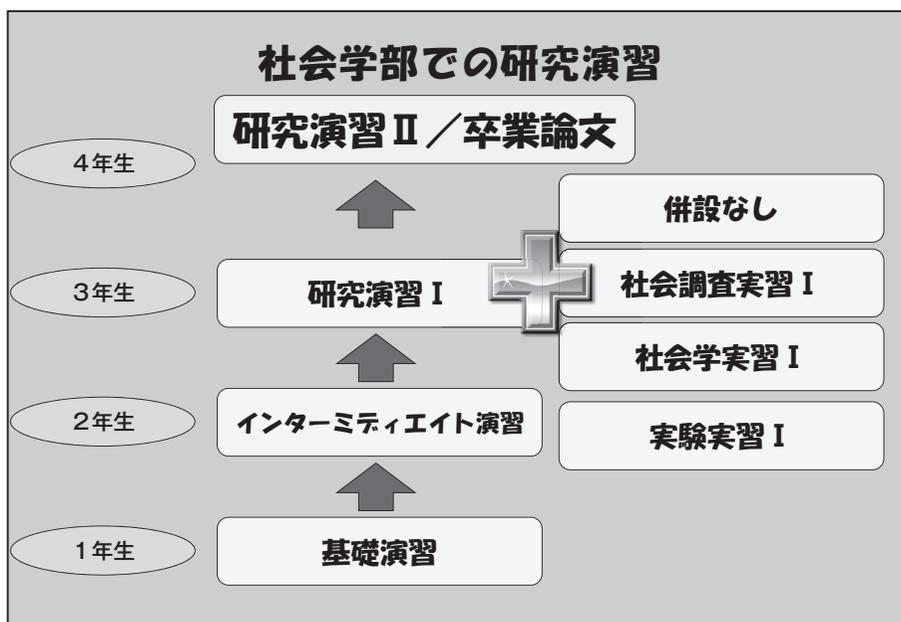
大岡 栄美 (関西学院大学 社会学部准教授)

## 1. 社会学部におけるゼミナールの位置づけ

社会学部の大岡と申します。本日は、お忙しい中をお集まりいただきましてありがとうございます。私からは「社会学部研究演習・社会調査実習の運営の事例報告」として、社会学部のゼミナールの現状と、私自身のゼミナールにおけるアクティブ・ラーニングに向けた取り組み実践をお話しさせていただければと思います。

社会学部の入学定員は650名で、学生数の多い学部になります。その中で少人数形式の授業を、1回生から4回生まで、基礎演習、インターミディエイト演習、研究演習Ⅰ・Ⅱ、卒業論文という形で、継続して段階的に進めています。これらの授業では、ディスカッションやプレゼンテーションなど、グループ学習を通じたアクティブな学びが導入されています。

また社会学部の、3回生からの研究演習では、社会学実習、社会調査実習、実験実習を併設する、もしくは実習を併設しないといういずれかの形でゼミナール運営を進めています。学生は自らの形式のゼミナールを選択するかを考えます。1ゼミナールの定員は約20名です。



## 2. ゼミナールの運営

私のゼミナールは「多文化・多世代交流のまちづくり」をテーマに、日本に住んでいる外国人と日本人の間での多文化理解や、多世代の日本人間の交流・居場所作り活動についての調査・実践を行っています。研究演習では主に文献報告を中心に専門分野の理解を深め、併設の社会調査実習でフィールドワークを行なうための質的調査法の取得や調査準備を行っています。

2年間の大まかな計画として、3回生は1グループあたり、4・5人のグループに分かれ、そのグループ単位で調査企画を立て、大学外のフィールドでインタビュー調査や参与観察を進め、その成果を調査報告書にまとめます。グループ学習を通じ身につけた論理的思考力、コメント力、洞察力に基づいて、4回生での個人単位の卒業論文制作に進んでいく流れです。

演習において工夫をしているのが、「ゴールの明確化」と「学びのモデル提示」です。夏期と冬期の年2回、4回生と3回生の合同報告会を開催し、それぞれの研究を報告し合います。また毎年1月末に開催する冬期合同報告会では、翌年度ゼミナールに参加する2回生にも参加してもらいます。3回生は約1年のグループ調査を通じて得た知見を公表し、自らの成長を確認すると同時に、2回生にとっての1年後のゴールを明確化する役割を担います。他方4回生は3回生に対し、翌年度個人で取り組むことになる卒業論文制作のイメージを提供する役割を担当します。これらの機会をもつことで、先輩が後輩に学びのモデルを提供します。また上回生は後輩の研究を客観的に批評することで、自分が演習を通じ培った批判性、論理性などを再確認する機会を得ます。ポイントごとで設けてある成長確認の機会は学生の学びへの動機づけに大きく貢献しています。

### 1. 授業年間計画

- **テーマ：多文化・多世代交流のまちづくり**
- **年間計画**
  - **3回生 グループ調査による調査報告書作成**
  - **4回生 個人での卒論作成**

**ゴールの明確化**

- **年2回の合同報告会の開催と報告書作成**
  - **春学期（7月末）4回生・3回生の参加**
  - **秋学期（1月末）4回生・3回生・2回生の参加**

**「学び」のモデル提示**

またゼミナールにおいて特に重視しているのが実践的な学習技能とコミュニケーション力の養成です。そのための工夫として、多くのゼミナールで実施されているレジюмеを使った文献輪読は採用せず、学生自身にグループ単位でテーマに沿った60分の報告をデザインしてもらっています。文献の要約は行いますが授業前学修を前提とし、パワーポイントを活用しての要約報告にと

どめます。授業内ではむしろ、学びを深めるためのディスカッション、ロールプレイング、ディベートなどに時間を割きます。学生たち自身がそれらを組み合わせた報告全体の流れを自らデザインし、組み立てます。他の学生に興味を持たせ、自分たちの考えを論理的に、分かりやすく伝えるためにはどうすればよいかを考えることで、ゼミナールの学びの中で発想力、表現力、クリエイティビティを育てる試みをしています。

### 3. LUNA を利用した授業外学習の取り組み

さらに、本学の学習支援システムである LUNA の掲示板を活用し、ゼミ報告の事後評価を書き込む取り組みも行っています。授業外での学修時間の少なさが指摘されていますが、ICT の活用により、授業時間外で問題意識の深化を図る仕掛けになっています。以下は LUNA の実際の画面です。授業終了後、学生同士がこのような形で、かなり具体的に相互に批判コメントを書き込みます。

LUNA

LUNA

LUNAで始まる私の一日

大田 栄美 オオオカ エミ(EM OOKA)

MyPresence

<b>作成者:</b>	<b>読まれた回数:</b> 31 (自分が読んだ数: 3)
<b>投稿日:</b> 2013年5月16日 23時54分49秒 JST	<b>計:</b>
<b>編集日:</b> 2013年5月16日 23時54分49秒 JST	

発表お疲れ様でした！当日1限から必死に打ち合わせをしていた様子が印象的でした(笑)  
 各々のパートわかりやす聞くことが出来ました。特に のところは説明が難しそうだなと文献を  
 読んだ際思っていたのですが、質問はしたものの、かなり整理されて頭に入りました。レジュメが整理されて一つ一つ  
 丁寧に説明があったからだと思います。  
 そして今回の発表の核ともなっていた のパートは考えさせられるものでした。  
 普段「多文化共生」と何気なく発しているこの言葉にもっと焦点を当てて、これからのゼミ活動に深みを出したいと思えました。

改善点としてはレジュメに書く量が多い箇所があって、発表に集中できなかったところでした。(特に2枚目です)  
 あとマイナビティに焦点を当てる際の例として出された身体障害者のWSは少し今回の発表との関係がすれていましたように思います。  
 ここでも日本のマイナビティに属する外国人に焦点を当てて、発表ともう少し関連づけたWSならさらに良いものになったと思います。

今回の発表で、私たちはまだ無意識に外国人をステレオタイプ化/カテゴライズしているのかも少し気がとめて感じました。  
 そして私たちはこういったことをより詳しく勉強しているから気づくことができるものの、多文化共生に全く知識がない人は  
 気づくことすらない可能性があると思います。ぜひ自分たちから、習ったことをOUTPUTして広めていきたいと  
 強く思われる発表でした！  
 お疲れ様です！

他者の意見を批判するためには、事前に課題文献を読む必要があります。また授業後にはゼミ生全員が見る掲示板にコメントを書くため、簡潔かつ、論理的に伝える力も必要になります。さらに自分がコメントをする前に前の人コメントを見て省察しながら、自分の意見の独自性を考えます。これらの取組みを通じ、授業外学修時間を自発的に増やす運営をしています。

### 4. 地域との連携と情報発信

私のゼミナールでは、現在4つのグループに分かれ、フィールドワークとインタビューなどの調査・実践活動を大学外で実施しています。具体的な活動としては、1) 神戸市東灘区にある「こべ子どもにこにこ会」と協力した、外国にルーツを持つ子どもたちの夏休み宿題教室の運営、2) 外国にルーツをもつ子どもたちに「自分たちの将来像」について考えてもらう関西学院大学でのオープンキャンパス企画の実施、3) 兵庫県三田市における「フレンドシップデイ in 三田」

という国際理解イベントの企画・運営、4) 兵庫県丹波市における、兵庫県立柏原高校インターアクト部と連携した、丹波地域で増えている外国人に対する意識調査、です。

いずれの場合にも、学生が大学外のフィールドである地域社会で魅力ある大人と出会い、成長する機会を得ています。これは、私のゼミナールに限られることなく、社会学部の数多くのゼミナールで研究テーマに応じ、様々な地域との連携を図っています。この結果学生は非常にアクティブに地域課題を発見し、問題解決能力を養う機会をいただいています。無論さまざまなサポートが必要になりますが、地域での調査実践は学生のアクティブ・ラーニングを活性化する大きな効果をもっています。

また大学外の地域で活動する際、私のゼミナールでは、ゼミナールのブログやフェイスブックを通じて、自分たちの学びを見える化する取り組みを行なっています。これは最初にお話ししたゴールの明確化の話とも繋がっています。フィールドワークは継続的に時間のかかる大変な作業のため、学生側も自分たちの活動のゴールが見えにくくなりやすいです。そのためブログやフェイスブックといったオープンな場で、自分たちの取り組みを発信し、地域の関係者や先輩などの外部から活動への反応を得ています。情報発信への反応から自分たちの活動の影響や効果を実感し、学びへの動機づけとなることを期待しています。

そもそも私のゼミナールでは、フィールドワークによる社会調査がメイン活動になっていますので、活動記録をつづっていくことが非常に重要です。それを公開することの教員側のメリットとしては、各グループの学習や調査進捗を確認できることがあります。ピア・ラーニングといいますが、教員のアドバイスが必要とところが当然出てきます。活動の状況に応じたアドバイスをするうえでも、これらのメディアを通じた情報発信は非常に役立っています。また学生は、ブログやフェイスブックでは自分の活動を学外に向けて書かなければならないので、自分の活動を客観視して発信する必要があります。そのため言葉遣いに気を使うようになるので、メディア・リテラシーの養成にも繋がっていきます。

ところで地域の中でニーズのある課題に対して、ボランティア活動で学生が取り組んでいき、実際の活動を通じて、より社会とつながった課題に対する学びを深めていく学習法に「サービスラーニング」があります。現在ゼミナールで実施している地域での調査・実践活動は、学士力として非常に求められている課題発見能力や提案力、あるいは色々な世代の人や立場・役割の人と繋がるコミュニケーション力を鍛えることにもなると考えております。しかし、このサービスラーニングについては、なかなか受け入れ地域との信頼関係をつくっていくのが難しいという問題があります。ブログやフェイスブックなどのメディアを通じ情報発信をすることは、活動のパートナーに当たる方に予めゼミナールや学生の顔を見える化し、連携をスムーズにする効果もあるのではないかと期待しています。

## 5. 今後の課題

以上、私のゼミナールでの実践を中心に、アクティブ・ラーニングを取り入れた学びの試みについてお話しさせていただきました。しかし、ゼミナールの中でアクティブ・ラーニングを実践する上で直面している課題もあります。私のゼミナールの場合、社会調査実習に関しての学生の時間的な負担が非常に大きいという問題があります。最初に申し上げましたが、社会学部の

研究演習は必修科目であり、学生全員がどこかのゼミナールに所属しております。しかし、その形態は非常に多様であり、研究演習に費やす時間が学生によって異なります。その中で、学生のモチベーションを損なわない活動時間の最適化については社会学部の中でさらに情報交換をしたいと考えています。

次に、先ほど申しました地域社会に向けての情報発信ですが、学生のリテラシーは技術の進歩に追いついていない面も多く、公共の場における情報発信には何らかの研修が必要かと考えております。またメディア・リテラシーの養成のみに限らず、地域での調査・実践活動やサービスラーニングをゼミナール運営に取り入れる際には、どのような導入的研修を学生に向けて実施していくのかを、学部全体として考える必要もあるでしょう。

また、社会学部の場合、フィールドワークでの地域連携を進めていく場合に、学部地域連携を担当するコーディネーター的な役割がないので、ゼミナール単位で、各教員がフィールドとの関係性をつくっていることも課題かもしれません。コーディネーター的な役割をどのように学生のアクティブ・ラーニングのために活用していくのかといったことについても、今後の検討課題ではないかと個人的には考えております。

#### 4. 直面している課題・改善案

- 時間的負担
- 社会性やメディア・リテラシーの欠如
- メンバー内の人間関係(LINE)の閉塞感
- 調査連携先との継続した関係性の構築
- 企画・調査受け入れ先の負担

- マイナスを補う学習効果
- ピアラーニング
- サービスラーニング
- 社会調査実習でフィールドワークやボランティアに参加する履修者の単位認定

とはいえ学生の主体的学びを促すアクティブ・ラーニングには、先ほど申し上げたような課題のマイナス効果を補う非常に大きな可能性を日々感じております。以上私のゼミナールでの取り組みの紹介が中心になってしまいましたが、皆様のご参考になれば幸いに存じます。ご清聴ありがとうございました。